

石橋湛山とウォルター・バジヨットの交点

北村行伸

一橋大学経済研究所教授

1. はじめに

石橋湛山は、1843年創刊の最古の経済雑誌である、イギリスの『エコノミスト』誌の編集長を務めたウォルター・バジヨットを、いわば自分の手本(ロールモデル)として、その言論や思想をたびたび引用している。また、自ら、バジヨットを好んで読んだ時期があったと公言している。

イギリスの『エコノミスト』誌と言えば、誰もが知る高級経済誌であり、その論評は経済の専門家の間でも、高い評価を得ている。石橋湛山が後に社長まで勤めた『東洋経済新報』は明治28(1895)年11月に刊行されている。その時点で『エコノミスト』には、既に50年以上の歴史があった。明治維新以後、日本が新興資本主義国として台頭していく中で、高級経済誌の刊行は時代の要請であった。『東洋経済新報』および英文雑誌『オリエンタル・エコノミスト』(1934年5月創刊)は本家の『エコノミスト』を目標に、さまざまな工夫を凝らしながら時代を生き抜いてきたのである。

石橋にとってバジヨットとはどういう存在であったのだろうか。両者には共通する点が少なくない。共に経済学の教育を大学で受けているわけではなく、その知識は職業上得た経験と独学に基づいている。むしろ両者は思想、哲学、文芸などへの関心を大学生時代よりもっており、それは社会人になってからも持続した。いうまでもなく経済雑誌の経営や編集に携わり、資本家や銀行家、政治家などとの交流も多かった。同時に、両者所属する国家の置かれた歴史的、世界的な立場の違いが、両者の判断や考え方に違いをもたらしている。例えば、バジヨットにとってみれば、植民地支配は大英帝国にとって不可欠の要素であり、それを拒否するということは想像できないことであったが、石橋にとっては、中国大陸から手を引くことは、日本の国際的な立場上、望ましいという主張をしていた。これは、当時の世相からするとときわめて異端の意見であったが、歴史的に冷静に振り返ってみれば、石橋の主張は正論であった。また、政治とのかかわりでいえば、バジヨットは政界への進出を四度も試みており、一度も当選することもなく終わったのに対して、石橋湛山は1946年5月の第1次吉田内閣

で大蔵大臣として任用され、1956年12月には鳩山一郎の後を受けて内閣総理大臣に就任している。政治家としてはバジヨットよりはるかに成功している。

バジヨットも石橋もジャーナリスト的な嗅覚と実務経験を踏まえて、制度の究極的な機能とその問題点を指摘し、その対策を打ち出すという点において独特の問題把握能力があったと言える。彼らの著作は、問題設定が適切であり、普遍的な問題提起をしている点で今に残る古典的な地位を占めていることも共通している。この点に関しては第4節で立ち返りたい。

2. ウォルター・バジヨットの経歴

ウォルター・バジヨットは1826年2月3日サマーセット州ラングポートで生まれた。家業は商業を数世代にわたって営んでおり、父親トーマス・ウォルター・バジヨットはスタッキー銀行の共同経営者であり副頭取であった。父親がプロテスタントの一派であるユニタリアン派に属していたこともあり、ウォルター・バジヨットはイギリス国教会系のオックスフォード大学やケンブリッジ大学ではなく、ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジで教育を受けた。学部では数学を、修士では道徳哲学・主知哲学を専攻し、ともに最優秀の成績で卒業している。

1848年に修士号を取得した後、しばらく法律の勉強をしていたが、それを断念し、1851年にはパリに行き、同年12月のルイ・ナポレオンのクーデターに遭遇した。バジヨットはこの事件に関して書簡形式の評論を7本書いて、イギリスの『インクワイラー』誌に掲載されている。1852年8月に帰国後は、郷里に戻り、父親の経営するスタッキー銀行の仕事に就いた。同時に『ナショナル・レビュー』誌などに著名な政治家や作家に関する評論を寄稿していた。

1857年、バジヨットは、『エコノミスト』誌の創始者であり、自由党幹部議員の自由党幹部議員のジェームズ・ウィルソンから『エコノミスト』誌への寄稿を依頼された。ウィルソンはバジヨットが気に入り、家族ぐるみの付き合いをはじめ、1858年4月にウィルソンの長女エリザと結婚した。

バジヨットはこの結婚で、政界との接点をもつようになり、その結果は『イギリス憲政論』(1867)として実を結んだ。バジヨットは結婚の経緯からも明らかなように自由党の政治家と近く、特にグラッドストーンを尊敬していた。1865年1月には、バジヨットは自由党内閣の下で、グラッドストーンに対して、通貨発行権に関するアドバイスを行っている。また、1877年3月にはバジヨットのアドバイスで政府短期証券が発行され、政府の短期の資金繰りが大幅に改善された。

バジヨットはウィルソン家と婚姻関係を結んだことによって、もうひとつの財産である『エコノミスト』誌の経営を1860年に引き継ぐことになった。1861年より『エコノミスト』誌の3代目の編集長に就任し、1877年3月25日に51歳で急死するまでその地位

にあった。バジヨットの『エコノミスト』誌での仕事は、同誌の経営の他に、週2回論説を担当し、様々な問題に関して執筆活動を行うことであった。バジヨットは生涯に 510 篇の記事・論文を書いた。

バジヨットの著作は本書『ロンバート街』を除いて、彼がジャーナリストとして雑誌に寄稿した論文の形式をとっている。『イギリス憲政論』や『自然科学と政治学』(1872)も『フォートナイトリ』誌に発表された論評をまとめて単行本としたものである。1870 年代には経済学の研究を集中して行っており、3つ草稿(『経済研究』、『国際貨幣』、『銀価下落』)が残されているが、未刊に終わった。この未完の経済学草稿も含めてバジヨットの全著作は Forrest Morgan(編)の著作集に収められている。

3. バジヨットは日本でどう受け入れられてきたのか

バジヨットの著作は、明治 16(1884)年に『イギリス憲政論』が高橋達郎によって訳され出版されている。辻(ツジ:しん)による点ひとつ)清明(1970)の解説によれば、福沢諭吉や大隈重信らを中心としたイギリス立憲思想の信奉者の間では、バジヨットはよく知られた存在ではあったが、ルソーや J.S.ミルほどの強い影響を与える存在ではなかった。また、イギリスの憲法草案は君主の特権に制約をかける要素があり、ドイツ・オーストリアの憲法思想に惹かれた岩倉具視や伊藤博文によって退けられたこともあり、大日本帝国憲法に生かされることはなかったということである。

またバジヨットの主著である『ロンバード街』は宇野弘蔵の訳で 1941 年 5 月に出版されている。必ずしも金融論の専門家でもない宇野がなぜバジヨットを訳したのかは、極めて興味深い点ではあるが、著者はそのあたりの事情は知らない。ただ、宇野弘蔵は 1938 年に人民戦線事件に連座して東北帝国大学助教授の時に逮捕され、その後無罪となっている。1941 年には東北帝国大学を退職し、財団法人日本貿易振興協会日本貿易研究所に入所している。東北帝国大学退職前の 1940 年に、『ロンバード街』(1941)、日本貿易研究所でエリック・ルンゲ『捕鯨』(1943)を訳している。本来の専門とは違う分野の翻訳を行うことで精神のバランスを保っていたのかもしれない。

宇野は『ロンバード街』の記者あとがきで、「今日の複雑なる金融関係を基礎にして、これを全体的に包括する金融論というものは極めて困難なる課題である。他の部面の経済学の理論と同様に一応資本主義の完成した十九世紀中葉のイギリスの経済事実を基礎にして理論的に確立してからでなければ、今日の発達した複雑な機構は理論的に把握し難いのではないであろうか。記者は大体こういう見地から此の著作を、金融論の入門者にとってその研究の基本的な例題として役立つものと考えたのである。」と述べている。宇野が、バジヨットの銀行危機への対処方法の普遍性をどれぐらい理解できていたかは疑問だが、本書を訳して日本に紹介したことの意義は大きかったと言えるだろう。

長幸男(2009)は石橋湛山の研究者としてよく知られているが、バジヨットに関しても論じている。長によれば、「バジヨットの大きな特徴は。彼がきわめて多岐な主題について論じていることである」として、「ウォルター・バジヨットは銀行家・経済学者・政治思想家、そして批評家・評論家さらに文学者でもあり、ヴィクトリア時代の“最も多彩な天才”であった」というセント・ジョン・スティーバス(Norman, St. John-Stevas)の評価を紹介している。さらにラーナー(M.Lerner)の「彼は心理学者であった。…彼は、人間がどのようにして、また何故そのように行動するのか、と探求を続けた」という記述も忘れていない。同様の評価はケインズ(Keynes, J.M.(1915))も与えている。ケインズは「イギリスの経済学者の中で、バジヨットの地位は独特である。彼の経済学への貢献は最高級の優れたものだと一般に認められている。だがしかし、ある面で、彼はまったく経済学者ではなかったといっても間違いではなかろう。」と評し、その上で、バジヨットを心理学者と位置づけ、「偉大な人物や天才の心理学的分析家ではなく、中流の地位のもの、主として実業家・金融業者・政治家の心理学的分析家であった」としている。長は「バジヨットの分析が、金融問題の当事者の主体的側面(心理や行動)に焦点を合わせ、マネー・マーケットの動態的メカニズムを浮き彫りにしたことは、ケインズが流動性選好や不確実性・強気・弱気というような心理学的カテゴリーによって、きわめて人為的な組織である金融市場の分析要具を生み出したセンスと共通するものがある」と述べている。

バジヨットに関する経済学説史研究の最近の成果として山根(2016)を紹介しておきたい。山根はバジヨットの主要著作『イギリス憲政論』、『自然科学と政治学』、『ロンドンバード街』を中心に、相互間の関連を見出し、バジヨットの思想の全体像を明らかにしている。「バジヨットは生涯をつうじて政治や金融の場における「信用」や、「支配」または「統治」のしくみをあきらかにすることをめざしていた。統治機構であれ金融市場であれ、いまある組織や制度をいかに運営すべきなのかという経験的かつ合理的な観点から出発するのが、彼が提唱する「統治の科学」であり、「実業の科学」である。…バジヨットが制度分析をおこなうさいには、つねに「機能的部分」の観点から対象を理解する姿勢が徹底していた。こうした見方は、経験の中から理にかなったものを引き出すというイギリス流の経験科学的な発想に基づいていたと想像できる。…バジヨットが理想とする社会とは、「生き生きとした穏健」という資質をもった構成員が「議論による統治」をおこなう社会だったと要約できる。ただし、その担い手は「議論」の能力をもった「世論」を構成できる「カルチュアをそなえた1万人」にかぎられていた。」と要約している。

三谷(2017)は日本の近代とは何であったかを論じるに際して、そのベンチマークとしてバジヨットの近代概念を用いている。すなわち、「議論による統治」を中心概念とし、「貿易」および「植民地化」を系概念とするものである。三谷はこれらの概念を援用しながら、東アジアにおいて最初で独自の「議論による統治」を創出し、また東アジアに

においては最初で独自の「資本主義」を構築し、さらに東アジアにおける最初の「植民地帝国」を出現させた日本の「近代」の意味を問うている。石橋湛山が歩んだ近代日本をバジヨットの近代化概念で解釈するという試みは、極めて興味深いし、今後の石橋研究者に取り組んでいただきたい課題である。次節では石橋がバジヨットをどのように読んで、自らの意見の表出に利用したかを論じることにとどめる。

4. 石橋湛山はバジヨットをどのように読んだのか

石橋湛山がバジヨットに関して直接言及している論考は5点ほど確認されている(参考文献参照)。主要な議論について見ていこう。

まず、「物質文明と精神文明」(明治45年『社会』)では、「西行の歌に「何ものゝおはしますかは知らねども、かなじけなさに涙こぼるゝ」勿論この歌が西行にとって相当に深い意味の籠っていたものであったことは吾輩と雖も認めないわけではないが、しかし吾輩はそれと同時に常に斯ういうことを思うのである。何^どうも日本人は、何もののおわしますかも知らずして、無暗やたらと、かたじけ涙をこぼしたがる癖があつていかぬと」書き始めている。それに続いて、バジヨットは「国民性という言葉は、何でも国民の資質に関して説明の出来ぬ困難な問題をば持ち込んで行く逃げ場所であると。今の物質文明精神文明などという言葉が矢張恰度これである」と述べて、イギリスでも同様の指摘をバジヨットがしていることを紹介している。石橋湛山は、自分たちの用いている言葉の意味を合理的に考えずに、情緒に流されて論理的に説明することを回避する、あるいは忌避することを助長するような風潮に警告を発しているのである。

この記事は明治45年に書かれたものであるが、石橋湛山にとっては、第2世界大戦に至った経緯を考へても、彼の生涯を通して、最重要な問題であったと言えるだろう。また、これは現代まで続く、日本社会の宿痾のようなものであるとも言える。伊勢神宮に行って、その静謐な環境に身を置くと、身も心も清められ感動するということはあるだろう。しかし、それを感じられなければ日本人ではないとか、「やまと心」がわからないという差別の方向に感情が向かうことは望ましいことではない。学校や会社、社会で、集団行動をとるときに、「空気を読む」ことが求められるのも、それが行き過ぎると「空気が読めない」人がのけ者にされたり、批判の対象になったりする。学校でのいじめ問題や戦前の軍国主義による思想言論統制なども、非合理的な行動や思想を、まわりの者が無批判に受け入れてしまったがために起こったものである。今、国会で議論されている、種々の学校法人の許認可や各種の助成に関して、首相や官邸の意向に沿った「忖度」が官僚や各種の政府委員会の中で働いたのではないかという問題も根は同じところにあるように思う。石橋がバジヨットを引用している心は、これは決して日本独自の問題ではなく、多くの国に当てはまる非合理的な集団心理への警鐘で

あると解釈すべきであろう。

ついで、「中正を欠く思想界、之れ言論自由圧迫の結果」(『東洋経済新報』昭和 8 年 9 月 9 日「社説」)では、「古代の人類社会に於いては「即行」が道徳であった」が、「近代の文明社会に於いては、人間の此の性質は不適當である。生活の条件が野蛮時代と違って複雑となり、従って広く深き思慮を用いぬ「即行」は錯誤を起こす危険が多いからである」と論じている。石橋はバジヨットを引き合いに出して、言論の自由、思想の寛容を説いている。

「若しも我々が、即座の躁急な行動を阻止しようと欲するなら、多数の人々が、其の問題に就いて議論を尽し、意見の一致を来すまで行動を始めない習慣を作るより外はない。若しも其の議論に参加する者が、種々なる気風、種々なる思想、種々なる教養をもっている人々であり、而して其等の人々の意見が熟した所で行動が始められると云うことであれば、恐らく躁急の行動—少なくとも其の大部分—は阻止せられるに違いない。而して左様に、種々の気風、種々の思想、種々の教養をもつ人々に、議論を尽さしめることは、社会に言論の自由、思想の寛容が存して、初めて期待せられる事である」というバジヨットの議論(『自然科学と政治学』(1872))を引用している。

石橋は、熟議の重要性は世界各国に共通であるとしながらも、日本における問題点を強い口調で指摘している。「我国には、社会精神として、思想に対する寛容が無い。例えば、外交の問題にしても経済の問題にしても、軍事の問題にしても、或一派の意見と異り、乃至利益に反する主張をする者があれば、彼等は直ちに彼を異端邪説の唱道者として排斥する。それもまだ忍ぶとするも、往々にして其の異説者の背後には金銭其の他の不純の力の潜在するかの風説を立て、甚だしきは売国奴の悪名をかぶせ、暴力を用いてまでも、其の主張を圧迫せんとする者さえも現れる。而かも社会は、斯かる圧迫者を敢えて強く咎めようともしない。畢竟するに社会全体が、言論の自由、思想の寛容の大切なる事を知らないのである。其の結果は何であるか。国民中思慮ある分子は、国家の為め深憂に堪えぬとは思いながら、沈黙を余儀なくさせられる。批評は全く跡を絶って、後に残るは或党派の勝手次第の主張だけである。」

この記事が書かれたのは昭和 8 年であり、満州事変から 2 年、5・15 事件の翌年にあたる。軍部の暴走が始まっていた時期に書かれた必死の抵抗であったことは想像に難くない。

ここでの議論はバジヨットの中心的概念である「議論による統治」の必要性を訴えているわけだが、一般国民の参加による民主主義的な議会制度の下では、政党間、あるいは議員個人間が国会のしかるべき場で議論を行い、合意形成をしていくことが想定されている。古今東西の議会政治のあり方を見ても、国会で熟議が行われて、白熱した討論から、素晴らしい政策や法案ができるということは非常に稀である。むしろ数を力に、政策や法案を提出者側も十分には理解しないままに、議決し、後でこん

なはずではなかったというような情けない状況に直面することの方がよほど多い。これも、石橋湛山の時代の問題ではなく、今に続く問題である。我々は平和で、比較的経済的に余裕のある時代にいて、国民の多くが高い教育を受けているはずであるにも関わらず、熟議ができないことに対して危機感をもち、猛反省すべきであろう。

最後に「主権在民の自覚が肝要 今こそ一層高次の「合」の世界へ」(昭和 28 年 9 月 24 日号『学習院大学新聞』)では、「英国人には、アメリカ人ほどの物欲がない。働くことは、ほどほどにして、暇を求めようとする傾向が強い。ここに英国がアメリカに比し、物的生産の及ばない理由がある」という、当時でいえば英国病論の先駆けになるような議論を展開し、しかしヴィクトリア時代のバジヨットは「英国人はアクセクと働きすぎる、英国人は、もっと落ちつきをもち、閑寂を愛する習慣を養わねばならぬ」と論じている。この変化はどこから来たのだろうか。石橋は「バジヨットの時代は、英国の近代産業興隆期であった。その果実は、しだいに富の蓄積を巨大にした。かくて英国人はアクセクと働かずとも、この蓄積により文化を楽しみ、安易に生活する次の時代を作りつつあった。バジヨットの前記の言は、時代のこの変わり目にあたりて発せられたものであった」と説明している。話はさらに続いて、「しかるに英国は二十世紀に入り、バジヨット時代には夢にも想像されなかった二大世界戦争に遭遇した。十九世紀の産業興隆期に蓄積した英国の巨大な富(とくに対外投資)は、この二つの戦争で、ほとんど全部喪失した。もはや英国には、アクセクと働かずとも、ゆうゆう国民に文化生活を営ませうる余力がない。事情は全く変わったのである。だが英国人の性情は、右の事情の変化に伴って、まだ変わっていない。バジヨットの勧告のごとく、英国人は十九世紀の末期から閑寂を尊ぶ習性を養ったが、今日そんな余裕にない時代に移っても、この習性を保存している。これが、最近の英国で、あたかも、バジヨットのそれとは正反対の批判が行われ、国民にもっと働けという要求が提出されているゆえんであろう」と解説している。

石橋は、このような英国の議論は、日本の問題としてとらえることができると論じている。石橋は、執筆当時、その後の高度経済成長期をまだ見届けておらず、むしろ「その生産がまるで低下してしまった戦後の日本において、依然として資本主義興隆期の思想を追うことはどうか。私は今日の世界は、企業者も労働者も、資本主義も社会主義ももはや相対立する時代を過ぎ、一層高次の「合」の段階にあるべきだと考える」と書くことで、労働分配の拡大をもとめる労働運動に待ったをかけたのである。

我々は、この後、池田勇人首相の下で、所得倍増計画が打ち上げられ、国民生活の水準は急速に上昇し、労働運動も企業内組合の枠の中に納まって、春闘を軸とした賃上げ要求として制度化されていったことを知っている。

むしろ、ここでの石橋の論点は、少子高齢化の進んだ現在の日本において、新しいイノベーションや若者のリーダーシップによる産業革命の推進が見られず、失われた

20年ともいわれるような長期停滞陥っている現状と、かつて高度成長期にエコノミック・アニマルと軽蔑された企業戦士のモーレツぶりとの対比で使えるのではないだろうか。もちろん、今の日本の停滞の原因は、労働者が閑寂を好み、教養を身につけて非競争的になったということではないだろう。ある程度の生活水準を維持できる状況に達したことに満足して、それ以上の物欲がなかなか湧いてこないと考えるのか、あるいは、ある程度の平等社会の方が社会的な安定性があり、社会的に突出した金持ちや資産家を生み出さないような価値観が広がっていると考えるのか、あるいは高度成長期に成功した大企業が、経済社会をいまだに支配しており、新しいアイデアにあふれた起業家の進出を阻止していると考えなのか、はたまた、高齢化で年金生活に不安があり、安易に消費できないのか、これらすべてを混ぜ合わせた結果なのか。

今多くの国が長期停滞に陥っており、低成長と低インフレ(デフレ)の世界から抜け出せないでいる。日本銀行による超金融緩和策がとられて4年以上たつが、未だに、インフレ率の上昇には結びついていない。この問題に対する有効な処方箋を書くことは喫緊の課題である。

5. おわりに

石橋湛山の生きてきた明治、大正、昭和はまさに激動の時代であり、石橋はその只中において、戦前・戦中は軍部と占領下ではGHQに対して正々堂々と議論を挑んできた。この石橋の強さはどこからきているのだろうか。著者は、石橋の宗教心の強さの表れだと思う。社会の中で怖いものは、時の権力者かもしれないが、人間としてなすべきことの善悪は、広い意味で神が決めることであるという信念を持っているれば、その信念の赴くところで、正論を述べることに、いささかの迷いもなかったのだろう。

ご存知のように、石橋湛山は日蓮宗の僧侶の家に生まれ、甲府中学時代に得度を受けるとともに、大島正健校長に出会い、キリスト教の感化をうけている。石橋の中で、この二つの宗教がどのように整理されていたのかはわからないが、単純な宗派の違いを超えた、より大きな心のありかたとして釈迦やイエスの教えを理解されていたのであろう。

社会の中で生き延びることに汲々とした多くの国民や、村社会的な集団的意思決定の危うさと、問題点をいやというほど見てきた石橋が、普遍的な問題提起が出来たのは、卑近な価値判断を超越した、絶対的な価値を信じていたからだと思う。

石橋湛山やウォルター・バジヨットの問題提起は、今まで見てきたように現在の社会・経済問題に直接結びつく新鮮さがある。彼ら二人を結びつける交点は、複雑な人間社会の営みにある。この営みの本質が変わらない限り、石橋とバジヨットの著作は読み継がれるだろう。

〔参考文献〕

- 石橋湛山（1933）「中正を欠く思想界、之れ言論自由圧迫の結果」、『東洋経済』、昭和8年9月9日号社説、『石橋湛山全集』第9巻所収
- 石橋湛山（1937）「不安・猪突の行動主義 ウォルター・バジヨットの言を思う」、『中外商業新報』、昭和12年2月15日、『石橋湛山全集』第10巻所収
- 石橋湛山（1912）「物質文明と精神文明」、『東洋経済新報』「社会」、明治45年5月15日号、『石橋湛山全集』第1巻所収
- 石橋湛山（1917）「遊戯なき日本」、『東洋経済新報』「小評論」、大正6年1月25日号、『石橋湛山全集』第3巻所収
- 石橋湛山（1953）「主権在民の自覚が寛容—今こそ一層高次の「合」の世界へ」、『学習院大学新聞』、昭和28年9月24日号、『石橋湛山全集』第14巻所収
- 石橋湛山（1985）『湛山回想』、岩波文庫
- 鴨武彦（1995）『大日本主義との闘争』（石橋湛山著作集第3巻）、東洋経済新報社
- 半藤一利（2008）『戦う石橋湛山』、東洋経済新報社
- 長幸男（2009）『石橋湛山の経済思想』、東洋経済新報社
- 長幸男（1995）『リベラリストの警鐘』（石橋湛山著作集第1巻）、東洋経済新報社
- 辻清明（1970）『バジヨット、ラスキ、マッキーヴァー』（世界の名著 第60巻）、中央公論社
- 中村隆英（1995）『エコノミストの面目』（石橋湛山著作集第2巻）、東洋経済新報社
- バジヨット、ウォルター（1941）『ロンバート街 ロンドンの金融市場』、宇野弘蔵（訳）、岩波文庫
- バジヨット、ウォルター（2011）『ロンバード街』（久保恵美子（訳））、日経BP社
- 船橋洋一（2015）『湛山読本』、東洋経済新報社
- 増田弘（1995）『石橋湛山』、中公新書
- 松尾尊兌（1984）『石橋湛山評論集』、岩波文庫
- 三谷太一郎（2017）『日本の近代とは何であったか』、岩波新書
- 谷沢永一（1995）『改心は心から』（石橋湛山著作集第4巻）、東洋経済新報社
- 山根聡之（2016）『統治と信用—ウォルター・バジヨットに思想—』、一橋大学博士（経済学）学位請求論文
- Bagehot, Walter (1873) *The Lombard Street: A Description of the Money Market*, Scribner, Armstrong.
- Keynes, John Maynard (1915) "The Works of Bagehot", *The Economic Journal*, Vol.25, No.99, 369-375.
- Middleton, Roger (2017) "Walter Bagehot (1826-77): A Man for All Seasons", in Tiago Mata (ed.) *The Economist in History: the Political Economy of Liberal*

Journalism, forthcoming.

Morgan, Forrest (ed.) (1995) *The Collected Works of Walter Bagehot*, vol. 1-5,
Routledge/Thoemmes Press.